

詩に生きる荒野

ニルス・イェンセン作 奥田継夫・木村由利子訳



ニルス・イェンセン作

うた
荒野に生きる詩

奥田継夫・木村由利子共訳 鈴木康司画

篠崎書林

Da landet lå øde

(A)

【荒野に生きる詩】

定価 1,200 円

昭和58年4月1日 初版印刷

昭和58年4月15日 初版発行

訳者 奥田 継夫・木村由利子

発行者 篠崎 政義 東京都千代田区神田錦町1-13

印刷所 三 秀 舎 東京都千代田区内神田1-12-5

発行所 東京都千代田区 株式 篠崎書林
神田錦町1-13 会社

郵便番号 101 電話東京(291)2106番代 振替東京 6-109182番

8097-330046 3020

NDC 933

乱丁・落丁・その他不完全本はお取り替えいたします。(検印廃止)

荒野に生きる詩



日本財団支援

笹川良一記念文庫

財団法人日本科学協会

DA LANDET LÅ ØDE

by

Niels Jensen

Copyright © 1971 by Niels Jensen

Japanese translation rights

arranged with

GYLDENDALSKE BOGHANDEL, NORDISK FORLAG A/S,

Copenhagen

through

Japan Uni Agency Inc., Tokyo

第一章

静かだ。

土色をした粘土^{ねんど}づくりの家が静まり返っている。

牝牛^{めうし}の鳴く声も豚^{ぶた}が鼻を鳴らすざわめきも聞こえない。人が村にやって来ると騒^{さわ}ぎ出す犬の姿も見あたらないし、かみさんたちの声もしなかった。かみさんたちはどの村でも、どこそこの子がお腹痛^{なかいた}をおこしたとか、どこそこの豚は黒いまだらの仔^こを九匹^{ひき}も産んだとか、大声でしゃべっているものだ。

家の戸も牛小屋や馬小屋の戸も開け放されていて、煙^{けむり}一筋^{ひとすじ}立ちのぼっていなかった。灰色^{はいいろ}の屋根の下には生きたもののいる気配はなかった。村中ががらんとしていた。

丸みをおびた家々の土壁^{つちかべ}にはタールで、横^{よこ}に並^{なら}べて、荒々しく大きな黒十字が描^{えが}かれている。少年は今まであちこちでこの黒十字を見てきた。

少年は今、教会の墓地を囲んでいる石の壁にのぼったところだった。ここからなら村中が見わたせた。

やせかけていて、長い赤毛がもつれているので、顔が小さく見えた。顔は汚れで縞になり、ところどころ黒い泥がとびちっていた。このての顔は泥のついた手で目のまわりをこすったときか、泣いたあとにできる。

真つ黒な大ガラスの一群れが村はずれに見える農家の棟から飛び立っていった。

突然の羽ばたきと犬に似た奇妙にかすれた鳴き声に、少年は石の上で驚いて身をすくめ、口をあけ、小手で太陽をさえぎり、頭上を通り過ぎるまで目で追った。

夕陽が樹々の向こうの荒地に沈もうとしていた。

中の数羽は教会の屋根に止まった。東に飛び去った群れの鳴き声が長い間、聞こえていた。その間ずっと教会の屋根を見あげていると、カラスも止まったまま、見おろしていた。

——あいつらも、腹が減ってるな。

と、少年は思った。

一羽は西側の鐘楼に止まっていた。墓地は丈のある草が生い茂り、地面にはノコギリソウやニワトコやシダがはびこり、ネズの茂みの間に土が灰色っぽくもりあがっていた。同じような大きな土まんじゅうがたくさんあるので、少年は数をかぞえはじめたが、壁ぎわまで来たとき、四十五か五十五か、わからなくなってしまった。

そこで、体の向きを変えて石壁の外側の草地にとび降りた。高くからとんだために膝をついた。この辺りの壁は生まれ故郷のウルストープの壁よりは高かった。



体を立てなおしてから、家と家の間をぬって歩きはじめた。

背中^{せなか}には皮の紐^{ひも}で皮の袋^{ふくろ}をくくりつけてあった。皮の袋がコブになった、そんな影ぼうしが歩いていった。両手はあいていた。服の袖^{そで}は短く、膝丈のズボンは縁^{えり}がほつれていて、茂^もみや藪^{やぶ}を通りぬけるとき、足に傷^{きず}がついた。

家と家の間に来ると、はだしの足をおずおずと出した。足を切りそうなものが落ちているかも知れなかった。

とある家の前で立ち止まり、耳をすますと、薄暗^{うすぐら}くて中は見えなかったが、カサカサコソコソと音がした。

——ネズミだ。

と、少年は思った。

ここに来るまでの村で、どれだけネズミを見て来たことか！ 夢^{ゆめ}の中でもネズミだらけだった！

が、顔には笑^えみが浮^うかんだ。そして、人影のないこの村でたった一人、笑^{わら}い出した。小さい斑^{まだら}の雌鶏^{めんどり}がコーッコーッと鳴きながら、ひよこを数羽連れて現われた。

——どうやってネズミからのがれたんだ？

それだけで、嬉^{うれ}しくなった。雌鶏は人間を見つけると、すこし高目の声を出してひよこを呼び、あたふたと角を曲^まがって姿を消した。

「コーッコッ。コーッコッ。」

声を出してまねてみた。自分の声を聞くのは、静まり返った村の中だけに妙な気分のものであった。雌鶏の列は隣の家の中庭に行き、こちらを見た。それが門越しに見えた。雌鶏は草が表面をおっている堆肥たいひに向かって駆けた。草がおおっているも、堆肥の臭いにおがした。

そこへ大きめの雄鶏おんどりが現われ、何かを突つき出した。雄鶏は翼を羽ばたかせ、騒さわぎたて、坐すわりこみ、やがて、立ちあがり、動作を止め、最後にもう一度、激はげしく突ついた。

ネズミだった！

雄鶏は首をのびし、翼を大きく羽ばたかせ、二度も、ときをつくり、草のおおう堆肥の周りを尾を立てて、まるで、村全体を我が物にしているように、一周した。

——あいつを捕つかまえよう。でも、難かんしいだろうな。もっと簡単なやつはいないかな？ 運よく捕まえても、火がいるぞ。焼き鶏ガスト・チキンか。食べたのはだいぶん、昔むかしのような気がするな。あれはクリスマスだった。そして今は、夏。その間にぜんぶ変ってしまった。ここへたどり着くまではなんとか切りぬけてきたが、袋の中も空っぽ。粉こなが少しあるだけ。すぐ、食べ物を手に入れないと……。緑の道が続いていたが、このあたりの土はこえているのか、草が他の村より色濃いろこく茂さかっていた。一軒いっけんの家の前で立ち止まった。戸が他の家と同じように開いていて、天井てんじやうは低く、入るとき、背をかめなければならなかった。

高い板のしきいをまたいで、もう一度立ちどまった。中は薄暗く、いやな臭いがこもっていた。

目が慣れてくるまで、鼻に小じわをよせ、用心に用心を重ねて、煙出しの真下にあるいろりまで歩みをうつした。平たい敷石の表には灰と木の燃え残りがあつた。

いろりの内側にその中で火がたけるように、石が円の形で並べてある。すすけた素焼きの鍋が皮紐でつるされていたが、鍋の中に何が入っているのか、青いもやしののようなカビが生えていて、むかつくような臭いが鼻をついた。

天井で音がした。目をあげて構えると、灰色の大きなネズミが二匹、低い梁の上にいた。手の届きそうな近さだったが、ネズミは動じるようすもなく、逆に目を光らせて見おろし、ささやき合うように互いに鼻先で嗅ぎあい、その間も目だけを少年から離さなかつた。

真っ白な鋭い歯が鮮かに見えた。

ネズミがおびえていないということは、かなり前からここには人がいなかったことになる。

ネズミは家の中の食べられそうなものを食いつくしてしまふし、たとえ残しても、人間には食べられなくなっている。小麦を壺に入れておいても、ソーセイジやハムを天井からぶらさげて下に木のネズミ返しを仕掛けてもだ。

が、ここは幸運だった。煙を出す換気孔のごく近いところに茶色の塊がぶらさがっていた。

——でも、食べられるかどうか…？

少年は梁にあがるために、テーブルの上ののつた。

テーブルがあるのは豊かな家庭のしるしだった。今までにはセアンさんの家でしか見たことが

なかった。

梁の上に腹ばうと、手も服ももつと汚れ、臭いはもつとひどくなった。が、塊はハムだった！
しかも、食べられそうな大きな塊。

そのハムをうまく操^{あや}つりながら土間に落とした。音が家中にひびいた。同時にとびおりた。
いろりのそばに来てナイフが梁と梁の間に突きささっているのを見つけて、引きぬいてみると、
柄^えは木で、すりへっていたが、刃^やわたりが長く、どっしりと手ごたえがあった。これからも役に
立ちそうだ。

ハムとナイフだけとって、外に出た。外の方がよかった。空き家の中にいるのは好きではなかつた。

道のかたわらの大きな石に坐り、口に合う大きさにハムを切り、食べた。食べる音がひびいた。

——うまい！

と、少年は思った。

音をたてて食べるなど、注意する人も今はいなくなった！ 塩味がききすぎていたが、だから、
くさらなかったらしい。

——これなら、最後まで食べられそうだな。でも、できれば、パンといっしょに食べたいなあ。
そうだ、パンと粉だ。

思いつくと、もう一度、家の中にもどり、人が寝^ねていた上の棚^{たな}をさがした。思ったとおり、ネ

ズミの黒い大きいふんがあるばかりだった。

納屋に粉にしない小麦でもあればと思いなおし、納屋に通じる戸を通りぬけた。あれば、石二つで粉にひけるし、そのまま食べてもよかった。今までいくども食べてきた。

戸の周りの壁は木の枝で組んであって、梁の高さまで粘土で隙間をつめてあり、そこから上は枝の編み目がむき出しになっていた。

部屋はでこぼこの粘土の床で、水のたまっている窪みもあった。先日降った雨水にちがいがなかった。片側の干し草の山は灰色の塊ですえた臭い。梁から下がっている穀物を打つ竿。かしいで下がっているから、脱穀していた者が誰かに呼ばれたのかも知れなかった。

家畜小屋が横にあり、入ったとたん、ここでも鼻が曲がるような強い臭いがした。中を見わたし、臭いの出どころをつきとめた。部屋の隅に横たわっていたのは小さい角、二本の角のついた頭骸骨、胸骨、軟骨などで、ネズミどもの宴のあとだった。

——仔牛だったんだな。

と、即座に外にとび出し、新鮮な空気の中で何回も何回も深呼吸をくり返した。

あの臭いだけではどうしても慣れるというわけにはいかなかった。腐った肉の悪臭は強烈すぎた。今までにも、たびたび吐いたが、目に涙がにじみ出てくるし、腹があとあとまでしくしく痛む。それでも、仔牛や牝牛などの獣はまだましだった。それが人間のときは…？

あたりを見まわすと、太陽が落ちようとしていた。

——今夜はどこに寝ようか？

これがまた毎日の問題だった。いく夜も木の下や草むらで眠ってきた。ときには干し草の中にいたこともあった。家の中は、雨の日にかぎって納屋に入った。

「人のいない家の中では絶対に眠ってはだめよ。悪い空気がたまっているからね。」
母親は最後にいいのこして死んでいった。

なおも、たたずんでいると、新しい音が聞こえてきた。

ぎくりとなって、ふり返ったので、腰帯にさしていたナイフが草の中に落ちた。それは期待していない音だったし、突然だった。

——夢だな、これは。

と、少年は思った。

——いや、夢といえど、ほかのことも夢だな。ひとりぼっちになったことも。淋しいことも。村や森をずっと旅してきたことも。

夢ではなかった。教会の鐘は確かに聞こえていた！

音が聞こえている！

立っている場所から教会が見えた。音色は弱々しかったから、故郷のウルストープの鐘より小さいにちがいなかった。

——この村には、人がいるのか？ ペストでまた誰かが死んだのか？ それとも幽霊が鐘を鳴ら

しているのか？

少年は幽霊は生きていたときに、できなかったことをすると聞いたことがあった。

——多分、そうだ。人が死ぬと、半時間ぐらい鐘をついてもらえるのがふつうなのに、死ぬ人が多過ぎるものだから、鐘を鳴らしてもらえなかったので、自分で鐘をつきに來たのかしら。教会まで行ってみようかな。

そう考えただけで、恐怖におびえたが、よし幽霊にしても、悪い幽霊ではないと思った。悪い幽霊なら、教会に寄りつかないはずだった。

——もし、誰かが生きているなら？

その人も悪い人であるはずがなかった。教会は神の家であり、安らぎの場所だ。悪者は闇のよう

に外を取りまくことはしても、中には入らないはずだった。少年はゆるい動作で腰をかがめてナイフを拾い、腰紐にさす前にもう一度、手の中でナイフの重さを計った。どっしりした手ごたえがあった。少年は教会に向かって歩き出した。

第二章

少女は膝をついて、体を起こした。眠っていたらしかった。

うろろと周りを見まわしてから、がっかりした。目をこすると、ため息が出た。
—すばらしい夢だったのに…。

と、少女は思った。

マリエとマルタと三人で光の降りそそぐ道を歩いていた。道にある石という石が美しい丸い金に変っていて、家は家で、屋根の上で虹が色を落としたように七色にきらめいていた。金はいつか、粉屋のクラウスのところに一晩泊まった旅の人に見せてもらったことがあった。とある家から歓びの歌声が聞えた。星が一度に叫んだようだった。

心がふるえて、目から涙があふれ、そして、眠りから覚めた。

目が覚めてみると、やわらかくて、かぐわしい干し草の中だった。干し草は自分で苦勞をして、運び上げたのだった。

周りはいつものように薄ぼんやりしていて、暗さにはすぐ慣れた。雀がわら屋根にあけた二つ

の穴から光が差しこみ、それは二振りの輝く剣のようだった。陽の落ちる前はいつも光は斜めに差しこんできた。天井の下からはこりだらけのクモの巣が寢室のカーテンのようにたれ下がっていた。

手のとどく範囲のクモの巣はちぎりとついていた。屋根裏を歩きまわるとき、髪にひっかけるのはいい気持のものではなかった。クモの巣は風が吹きこむと、生命を吹きこまれたように、ふるえた。

かたわらの布の袋。

梁においてある素焼きの壺。

少女はまたため息をついた。自分がここににいるのに、マリエもマルタも遠くへ行ってしまった。そして永遠に帰って来ないのだった！

のろのろと起きあがり、屋根に開いた雀の穴に顔を寄せた。つまさき立つと、墓地の向こうに二つの土色の塚が見えた。塚はネズの茂みに守られていた。そこがマリエとマルタの永遠の住み家となっていた。

雀の穴からは村も見わたせた。畑の向こうから荒地へ。

すこし前までは家畜を見ることはよくあった。牝牛が歩いていたら、馬さえ一頭、見た。牝牛の鳴き声を聞くと、乳をしぼられたがっているのがわかり、胸が痛んだ。

けれど、このごろではめっきり見かけなくなった。きっと、もっと遠くの、森の中へでも行っ